



# 岐蘇林多

目次

論説

北山臺杉の栽培及製材法について

隨筆

高橋君の死をきく

吾輩は植所の下駄

日記

第三學年修學旅行日記(承前)

第二學修旅日記(承前)

嶽登山の記

市海へ入亭にて

雜報

學校通信

會員異動

其他

大正六年八月廿五日 第九拾四號 每星期日刊 第三種郵便物認可

## 論説

### ◎北山臺杉の栽培及製材法

に就て

西澤 静人

先頃私は本校第三學年修學旅行付添として關西地方をまわりました。別れた土産といふ程の面白い話ではありませんが、本題に就て少々見聞したる所を記して見ようと思ふ。

抑も北山臺杉の本場は何處であるか云ふに、京都市の西北約三四里に位する山城國葛野郡小野郷、中川、梅ヶ畑村等の總稱であるが、就中其の栽培の盛にして、併か優良材を産出するは中川村を最もとす。先づ栽培法を述ぶるに當り、同地方に於て稱へらるゝ臺杉の種類を栽培の順序に應じて擧ぐれば、本白、蜂山白、鬼灯白、柴原の四種ありて、その苗木の養成法は播種、挿木の二法あるも、播種法は手数を要する割合に成績良好ならざるに依り、當業者には餘り賞用せられず、敢て挿木を主とするを以て茲には該法につきて記することに致す。

の長さに於て削り、一尺位水中に浸し、粘土の塊を以て切口を包み、畑地を充分耕したる所に、六七寸幅の畦に枝の先端互に接觸せざる距離凡そ六寸位に斜に併列し、七八寸位に土を覆ひ、その上に日覆を設けて陽光の直射を防ぎ、翌春三四月頃一二回稀薄ある人糞尿を施し、三ヶ年目の春には約長さ三尺餘の苗木となる。是れを細根を毀損せざる様掘り取り乾燥せざるため、蓋又は畝に入れ植栽地に運搬さる。植付本数は地形、地味、勞力等の關係上多少異なるも一町歩には三千本乃至四千五百本を最も適當し、若し、枯死苗あるときは翌春直に補植さるゝに至る。

二、植栽後に於ける手入れ法は、植付後二三年間は、毎年梅雨後及び九月上旬の兩度に於て下刈を行ひ、その後尙六七年間は、毎年七月下旬より九月上旬の間に於て一回下刈を爲す、而かして刈拂せし雜草歇木は苗木の根際に敷き肥料と爲す、その後は三四ヶ年毎に枝打を行ふ。この法は先づ地上より約二尺の間を於て最も健全にして四方に充分生長せる枝と、先端より一尺七八寸の枝を残し、その中間の枝を鉈を以て幹に沿ひ平滑に切り拂ふ、下部に残存せる枝は第一伐採後幾回となく幹を生立せしむる臺枝となるものである。

三、伐採法は丸太仕立林にありては、植付後三十年乃至四十年とし、垂木丸太林にありては、十五年乃至二十年迄を適當とす

而かして伐採するに、鉋及び鋸を用ひ、萌芽を損せざる程度に於て下部より伐る、若し伐り方高ければ雨露の爲め伐口腐敗し臺株の生命を短縮するの恐れある。

四、伐採木の製材に對しては、直ちに杉又は扁柏の心材にて造りたる籠を以て縦に條を付け、材幹を損せざる様枝極の附着點まで、一枚に剥皮す、その剥皮材は林内の立木に約一週間立て懸け置き、既に乾燥せるものより樹冠を去り適當の長さで切断す、之れを屋内に運び込み、普通の丸木材に對しては、春割と稱して木の膨れたる部分の木髓に達する迄鋸を以て割目を入れ、その割目に適當の樫矢を打つ。而して之れを空氣の流通よき屋内に於て、二十日乃至三十日間臺の上に横たべ、或は立て懸けて乾燥せしむ。充分乾燥せば屋内より取り出し、清水に數時間浸漬し、春割材にありては龜裂の全部復舊するを待つて、同郡中川村菩提の瀧より取りたる白砂を用ひて、光澤の出づる迄一様に磨く、この磨くには男一人一日の工程一丈位のものにて約四十本を普通とす。既に琢磨終れば清水にて洗ひ日陰に立て懸け水分の去る迄乾燥せしむ。斯くして出來上りたるものを製材と稱して屋内に運び込み貯藏するにあり。

は各地に到るも、就中大坂、名古屋、東京九州方面へ搬出せらるゝと云ふ。而かして此等の使途は普通丸木材は書院或は茶室の柱又は桁等に供し、垂木丸木材は軒先の垂木、天井椽に用ひられて頗る需用多しと云ふ。(終り)

隨筆 高樋君の死をきよめて

八千八 溪

▽此頃林友誌が毎號校友の死を報じてくる事は誠に悲の極である、遠山君、原田君、高樋君、何事も運命である、何事も天帝の命する所だと云へばそれは其れまでの事だ然し年齢から云ふても我が校友は人生五十年と云ふ其の五十の坂にはまだ大分間がある譯だと思ふ、まして人間は生長期の五倍の生命があるものとしたら人間凡そ百年の壽を保つべきだ、そうすると我が校友は第一回の人から猶人生の半に達しない活動の第一歩の中にある譯だ、考へると考へる程誠に悲の極であると思ふ。

られた時あの舊校舎の雨天体操場であれが第一の高樋君だと聞いた、其時が初めてだ然し其時は其れだけで何も話をしたと云ふ譯ではなかつた。

種々話した大分よい様だ、君元氣だよ、元氣を出して静養しなへすれば大丈夫さ、おぼろげな風でも引かぬ様にしておいて云ふて居つた。

君も大分酔ふて之が僕唯一の隠憂だなんて云ふて歌詞は忘れたが大きい張のある聲で木曾節を歌はれた。

▽其れから何かの事から校友の死と云ふ事に話が移つて行つて下畑君の自殺の事など第一の中村を初めに随分死んだ、心細いよ、なんて云ふて居つた其の君も今は又其の人々のあとを追ふて鬼籍に入つてしまつた、何と云ふ痛ましい事だらう、そんな話の出た時には元氣もあかつたが又同級の齋藤君と撃劍の話が出て、『先づ齋藤には敵はなかつたが其の外では先僕か、チイ』なんてかか／＼の元氣だつた。

▽會果て、其れでは諸君又來年かんで云ふて別れたのが僕の君に於ける最後だつた、恐らくあの時會合した人々にはあれが最後だつた人もあつたらう、外に出ると大峯だろしが身にしみて下駄の音のみ高かつた。

君は誤解される人ではないかと思ふ、之は私の誤解かも知らんが私がある同窓の先輩に聞いたならば『あの君は働巧だからチイ』と云ふて居つた其の言葉はさう云ふ意味が知らんが私は何か此の言葉の裏面に潜んで居るはしなないかと思ふた、然し君は誤解されてもかまはん人たつたらうと思ふ。

▽君は又森林植物の研究にも随分努力して居られたさうで造詣も又深かつた事と思ふ、近年森林美學の上から瀧は見のがすべからざるものだと云ふて瀧の繪葉書や寫眞を集められて居つた事だ、之等も君に今年年の齡を保たしめたから何と今一段の研究が加つて大いにあつた事たらうと思ふ、誠ににたい事であつた。

▽以上は私の知つて居る君の事を只順序もあからべたゞけの事で有つて誠につまらぬ事である、只林友誌を譯もあつた事を書いてつゞく事は誠に申譯の事だ、私にも何かこう思ひ出されるまゝに書き並べたのである、どうか林友誌を只譯もなくこんな事であつた事を許して頂きたい。

(八月十日旅にて)

◎吾輩は便所の下駄

白 菊

吾輩が静かに世に出てからの事をあれこれと下駄屋の塵の積つた棚の上で考へて居ると、吾輩の頸筋をぐいぐいと擱んでひき上げる

者があると思ふ、さう足が棚から離れて棚の上には吾輩の座つてゐた形が彫り込んだ様にはつきり残つて、同輩は並んで塵のかゝつた臉をさも重たげに動かして見てゐる、つたなと思つてゐると、さう／＼吊して行き出した、非常な震動が眩暈がし出して胸が苦しい、吾輩は悲しくなつた、おぼろげな身を押へつけて、目を細く開けて邊ををろ／＼と見廻すと、すぐ傍に同輩が四人同じ様に目を閉じて居る、友さへあれば、未はさうあるかわからぬ、又目を閉じた、しばらくすると震動も止んで、尻がばかに冷めた、顔はかし暖かい様な心持がするから、目を開くと見るからぞつと寒氣のする爐の側の石の様なコンクリートの上に置かれてゐたのだ、天井を見上げると煤で眞黒、そこから太い針金の鈎が吊さがつて、それに大きかあまり美しくもかい銅の湯沸が掛つて、吞氣をうにらしり

を温た／＼と、口から白い湯氣を春の野に立つ陽炎の様になつて出してゐる、その下の吾輩の一番こわい火は非常に熱した鐵の様な紅になつたり、白金の光がうすらぐ様を弱い光を投げたりして、頭といはず、胴といはず、白色の衣を作つてゐる、あれでもまた寒いたらうかと、物珍らしげに

眺めてゐると、急に頬がじり／＼と焼け出
した、吾輩はアツといつて氣絶した、丁度
夜あ／＼或はあまり暇で困難する時の晝寝
の時の夢を見てゐる様な気がしてると、イ
ヤといふ程コンクリートの上へ落されて、
吾に歸ると、頬が暑い痛いのつて御話に
あらない、尻がびり／＼して引き裂かれる
様だ、たまけに心臓の鼓動が激しい、かう
呼吸が切迫する、その空気が鼻の中を通る
時はどう云ふものか未だ嗅いだことのない
気が遠はくある様な鼻のちぎれる様ないや
な匂ひがある、如何に若い時は苦勞をせま
いといつた所で、吾輩にはこゝには暮せな
い、逃げてくれよう、一息入れて立とう
としたが、ツイ今吾輩を蘇らせた時、即落
ちた時足の骨が折れてしまつたものだから
どうして立てよう、吾輩に足はあつても動
かんのはこの事から、吾輩は悲しくて悲
しくて終に大聲を上げて泣き出した、泣い
てゐる中に今まで一寸微笑しても同輩に羨
まれる程愛嬌がたつぷり出た頬は焼かれて
もう役に立たなくなり、其上醜く／＼あつた
事たらうと考へ出すと、一入悲しさが増し
て来た、いくら泣いても誰も慰めに來て
くれるものはない、そう／＼吾輩と一緒に
來た友は涙に腫れた臉をこすつて見まは
すと、皆同様に動けなくなつて泣いてゐる
見廻すと人の家の入口でもなさそうであり
そうた、そうかと云つて奥でもない、人の
家にはあまり小さすぎる、便所にしてはあ

まり大きすぎる、しかしばかど鼻に答へる
所と推量すると、或は便所かも知れぬ、であ
るとした所が足がきかなくなつて見れば、
又人間といふやつにもつて行かれるまでは
いや／＼とあしに此のくさい所に暮さねばあ
らぬ、その暮す所が未だわからぬは益々、
以て可笑しいぞと疑問を抱いて居ると、たん
／＼と暖かになつて午頃となつた、するとド
ン／＼と地震の様を人間の足音が此方に近
づいて来る、やつ来たぞ／＼と思つてゐる
と、ウンといふ程目方のあるものをのせる
と、これは踏み殺されるか又例の貧乏震を
すると、空中へつと上ると思ふと、かんとい
ふ音の響く程、踏みつけられると、ウンと
云つて呼吸が止まる、又吊し上げたかと思
ふ頃はウンといふ、ウン／＼いふ度毎にい
や／＼と益々なる、六七度ウン／＼と呻吟
すると、風變りのした前は各後はコンクリ
ートの平原といふ一寸見晴しのい／＼所へウ
ンと据へられた、しばらくすると天の方か
ら瀧が落ちて来た、飛沫は谷の向ふの屏風
岩までもい／＼と岩までも飛ぶ、それた
からこの絶景を苦しなから眺めてゐると
吾輩の焼痕のある顔へも飛びつく、何でも
此處へ来る以前瀧の水は冷めたものだと
聞いてゐたが不思議だ、いや／＼とよつとした
ら吾輩の顔があまりほつてゐるから左様
に感ずるのかもわからぬ、／＼かしい、景た
未だ日光の華巖瀧や紀州の那智の瀧は見な
いでしらないが、吾輩はこの瀧が日本一の

瀧ではあるまいかと思ふ、こんな事を思つ
てゐると瀧の水がどうしたものかどまつて
地を震動せしめる様な段々の音もびたり切
れてしまつた、しばらくすると空中へ後と
去りに吊るし上げ、左向をしてもこの所ま
でウン／＼いさせて来て、／＼と瀧の方即
い／＼と句のする方へ頭を向けて重い荷物を下
ろしてくれた、隣りに居る友人が「おい君
の顔は焼痕の上に卵形の模様があるぞ」と
いふ「うん君の顔にもあるせや陸形のが」
(未完)

日記

◎第三學年修學旅行日記(承前)
五月二十九日晴天 火曜日 翠峯
都合の上にて朝早くより正午梅田驛に參集
するまで自由行動をこる宿舎は道頓堀とて
市の目抜の所あれども天王寺、新世界、高津
社、生玉社、天守閣、中之島公園など更に造
幣局築港まで見るべきは四方に散在して何
れを先にして見るべきと云ふ參謀會議は諸
種の地圖を擴げられて仲々に天正の小田原
のそれよりも見物なりき
天王寺は大和の法隆寺と共に聖德太子の建
立に係り常に古きを捨て新しきに趨く大阪
界限にて唯一の保守的のシンボル也新世界は
享樂的大阪人の誇りとする所海拔三百尺餘
の通天閣と稱する大鐵骨塔あり其他動物園
と云はず何と云はず赤毛布黨をして魂魄を
して眼と共に千萬回の大宙返りをなさしめ

すんば止まず千日前も道頓堀も大阪的氣分
の現はれし所、金看板の美しき中座、角座
には狂言のかゝるやらんごんごんごんごん打
ちからす太鼓の撥の音賑かなり戸をしめる
音あける音からころと云ふ下駄の音格子づ
くりの商店の暖簾に記せる筆太の白き文字
帳場の奥に晝もあはちらちらと輝く薄らあ
かりの赤き灯、前垂姿の番頭が矢立をさし
たる商人と大阪詞に物語る聲、家號を記せ
る傘の道を行くかど何一つ懐しからざらん
高津様、生玉社は成金の養錢多きを加ふる
と共に益々靈驗あらたかありと云ふ造幣局
は都合にて參觀を得ず大阪城も評判の如く
名城ありと見たり難波橋、心齋橋、四ツ
橋は大阪市場の中心とも云ふべく巨商多く
車馬の往來繁し加ふるに萬字巴をなせる濠
堀は地上にも増して物貨の運送を鋭敏なら
しめ實に今日の大坂を生めるは水ありとの
感を深うせり
午後一時餘分梅田驛より大阪を辭す西行が
曾つて難波の芦に悲みを賦せるを思ひて坐
る時なるものの力を感ず願れば煙都のあた
り茫茫としてあの活氣ある姿も見るに由あ
かりけり
三宮附近より右の松山に西洋風の邸宅多く
須磨よりは左に近く海見て所謂白砂青松
續く、一の谷は此附近にや右手の山は壽永
の昔關東の荒武者が那須の駿足にて岩の鼻
岸の額を馬の足を手綱に合せて馳落し馳上
り尻輪に乗り懸り前輪に平み引据へ引詰め

鞭と鐵と打合せ唯一息に破りたる越には
あらざるか山陽の所謂義経屈其所騎馬後足
一鞭而下三千騎皆傲之胃較相觸直達城後大
呼而入との鐵拐峯にはあらざるか
須磨の浦の夕櫓かけて哀れなるは平家一
門の悲惨なる最後なり歡樂の甘酒に武を忘
れたりとは餘りに優しき御曹子達の頭上に
被らすべく酷ならずや中にも壽永三年如月
七日の朝またき吹きすさ北風に散る落花
のあり様潔く勇しき無官大夫敦盛をはじめ
とし玉琴姫や玉織姫、小宰相の物語、菅丞
相が長き夜をながめかねし所とさくも旅
愁一滴の涙無き能はず
淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寝ざめぬ關
守もすまへり丸もほのぼの島かくれゆ
くあかしの浦の夕霧に吟懐を止め得ざりき
史を詩と姿とに富める所須磨寺に残る青葉
の笛に名残りを惜みて車は益々西に向ひぬ
加古川は南北朝時代の古戰場ある加古川に
や會根には會根の松あり姫路には白鷺城あ
り天正年間秀吉が畢生の偉業、中國經略の
本城たり
備前に入りてより秩文古生層の崩壊地赤松
の單純林多し追其間に砂防工事の行を届け
るを見る
夜の七時頃岡山につく郊外には千頃のみ田
多し「私しや備前の岡山育ち米のある木を
また知らぬ」とは何をうたひしものや其
夜の九時頃停車場に棄兒ありて人の騒ぐに
すやすやと眠むれり本邦中比較的豊潤なる

南國に來て見るもの聞くもの珍しきが中に
唯かはらざるは運命と悲哀を脱し得ざる人
生のみ
五月三十日 水曜日 晴天 正風生
「明日思ふ身はとく歸る花見かな」愈々明
日は瀬戸内海横斷と口々に語りつゝ夕はい
つもより早く結びし岡山城下一夜の夢は破
られ早朝旅館を後に出發し岡山縣廳にいた
りて宇野、山本兩技師より岡山縣の林業及
同縣の砂防工につき有益なる講話を承り且
つ茶菓の接待を受けしはし雑談の上をこそ
辭して兩技師の案内により後樂園へ杖を
曳く

後樂園 そよ吹く朝の薰風むかへられ
徐ろに園を歩すれば春の名残りの花一點二
點綠陰に明かなるさま初花よりも貴く思は
れ詩情坐ろに動く若徑は曲々として竹樹瀟
洒幽禽啼々として境自ら静かあり
樹陰の榻に腰下すも池畔の芝生に徘徊する
も亭榭に憩ひて茶啜るも皆人の心を爽かに
して初夏の愛すべきを知らしむ
殊に涼風徐ろに簾箔を拂ふ池畔は望みさへ
打ち開け彼處ある翠揚の下に白鷺人立する
があれば此方なる浮萍の揺ぐあたりには緋
鯉勇ましく跳ね水輪々つるも亦風情ありか
く一巡の後暗々たる鳥のなくねにたくら
れて園外に出づ
\*岡山出發 午後二時卅分岡山を後に宇野
線車上の人となる、此邊地、平かにして山

や、遠く芳草錦の褥をあざむく處には長き杖を風に翻し摘草に餘念なき乙女の群の三々五々徘徊するありかくて鹿田、妹尾、早嶋等の小驛二三のトンネルもいつしか打ち過ぎ松樹多き幾多の低山を後に午後三時廿九分藻の香高き宇野驛に着す

普通寺 弘法大師の呱呱の聲を擧げし地を善通寺は讃岐第一の巨刹にして四時参詣人の絶ゆる事なしあたりの山々にはあまり大樹なげれど松樹のみをもつて疎林を形成したれり

本社には風に風の神として世に知られたれば航海者は海上の安穩を祈りて神祐を希はざるはなしされば一行も神前に頼づきて明日の歸航の平穩無事なることを一向に祈り奉りぬ

古の恨みを留めし所謂壇の浦は東面を山麓一帯の總稱にして近く五郎山を眺む其の他崇徳天皇の御陵、勇士那須與一の扇的射し跡も山上より一々指呼し得べく西は一灣を隔て、高松市は只手に取る如く遠く見渡せば内海の島嶼點々基布し山陽の連山模糊として雲のなびくか如く風光佳絶にして島中第一の眺望台とも云ふ可し山より降り浦生にて小船を雇ひ二隻に分乗して船出したるか波静にして一行は昨日金刀比羅宮に参拜せし御利益まのあたりに現れたるを悦び得々として校歌を合唱するあり船中面白く高松港に着きぬ

◎第二學年修學旅行日誌(承前)

▽五月三十日 晴天 山本 茂

明くれば三十日雨と思ひし天候も名残なく晴れ渡り絶好の旅行日和なり一同喜色満面に浮べ七時半旅装を整へ二組に分れ二名の案内者に導かれて朱塗の神橋を左に見つ大谷川の清流を渡り杉並木を縫つて小坂を登り境内に入る社殿宏壯にして善美を盡した天然の美に加ふるに此人工の美を以てしたれば『日光を見ざれば結構と云ふな』と云ひたる古人の言も宜なりと頷かしむ、中にも陽明門の如きは只感歎の聲を放つのみなりき、此門前にて一同記念撮影をかし奥殿及家康の廟を訪ひ更に歩を寶物館家光廟に運び二荒山神社を拜し電車に乗じて馬返に至り此處より坂路を大谷川に添ひて中禪寺

に向ふ日頃銀へし健脚にまかせ急峻なる舊道をたどり方等般若等の瀧を眺めつて天下一の名瀑華嚴を見る之即ち大谷川の上流にして中禪寺湖の水の溢出するものなり恰も萬斛の雷を運んで天より擲下する如く其餘沫迸りて暴雨の至るか如し十二町餘を下りて瀧壺の見物をなし中禪寺湖畔に出づ湖面鏡の如く男体山の影を倒し寫し出し夕日を浮ぶる様筆舌に盡すあたはず一行は此絶景を見て踴躍し或は湖上にボートを出して大氣煙を上ぐる有り糸を垂れて釣りを試みる者等も有りしか夕靄次第に低く下りて湖面を包む頃名残を惜みて旅館に引き揚げたり

▽五月三十一日 曇 箕部 覺明

末筆ながら當地在任の卒業生諸君には本日馬返しより中禪寺までわざわざ同行せられしのみか一同に對し茶菓を供せられしは一同の深く感謝する次第あり

の快樂に思はれた。『ボートは沈みぬ千尋の海原』と前からも後からも響く、水は藍を流した様に眞青た向ふにコヨック島が見ゆる、一時間も先に出了たさきの生徒は岸を迂迴して居る、さぞ羨らやましい事たらう、僕等が岸に着く時彼等は通り過ぎたいよ、上り八町下り二里の足尾道にかゝつた、霧を分けて上れば、臭氣鼻を突いて足尾は如何と安じられた、下りの道の邊から木は段々少なくなつて熊笹や檜などが青味を持つて居るのみ、山の荒れた所に砂防工事か施してある、此所は他の所と異つて鉛毒に堪へ得る様な樹種か植ゑられてある、足尾に近づくに従つて荒れ様か甚たしい、青い物と云つたら一つもあひと云つてもよい、然し臭氣は想像した程でもあかつた。

▽六月一日 鷹見 勳

母校卒業生の〇〇君に案内されて足尾製練場を見たか門外漢には不得要領であつた、八町程ある間藤に行つて汽車に乗つた、驛長兼小使の信號旗によつてマツチ箱の様を、瀛車は高崎に向つた、雨は又降り出した、歩みに疲れた僕等は窓にもたれ臺によつて寝た、桐生に瀛車は着いた、此處にてマツチ箱を捨て、稍々良いのに乗換へた、雨は止んで空は晴れて来た、瀛車はごんごん走つて高崎についた時は七時過ぎ驛前なる高崎館に投じた。

時は進みて間断あし長き十餘日の旅行も最早今日一日とはなりの最後の宿り高崎幾百の麓に昨夜の夢戀しく別れを告ぐれば水よりも涼しき曉風心ありげに若葉をすべりて車窓に凭れる我等爽氣身に沁みて愈々清し八萬石大河内氏か榮華の昔を忍びて汽車は六時遂に高崎驛を發しぬ平々坦々麥圃盡くれば桃園所々に點在し桑の喬木めきたるも又かく面白し妙義の奇峰遠くに曉霧を含みて昨日の雨に一入縁を増し山近きて車窓を壓すと見る間に早や碓氷の險に入りぬ、山氣一度に迫りてアハヤと云ふ間もあらず聞々裡只聞こゆるものは轟々の響のみバツと射す光に急ぎて窓を降せば山愈々緑を増しつゝじの紅なるは口紅散らしたるか如し雪噴く溪水聞きもあへず再び暗々黒裡明又闇闇又明廿有餘回にして避暑の名地として近時其名を賣れる輕井澤を過ぎ我等は信濃高原の人とはなりぬ

一時卅二分なりき一行は直に坂緩にして風薫る町路を歩みて刈萱堂を訪れ坎珂不遇の石童父子か昔語を忍びて人も知る天下の古刹定額山善光寺に詣る其れより爲す事もなくして四時間次の汽車を待つべかりしを安藤林務課長の特別ある案内を蒙り縣廳を參觀するを得たるのみならず課長は我一行の爲に長野縣治水事業の現況及我等か今後に於ける心得等に就て淳々として教を垂れられしは眞に一行か感謝せし所なりき日稍々傾き青風に響き渡る汽笛勇ましく四時七分長野を後に汽車は幕進しぬ鮮緑に染むる高原特有の景色は愈々眺望展け眼下一帯碧藍の波立ちて所々に麓の群小島となりて点在するも興深し筑摩の河水溶々として雲に入る邊り史の上の花形役者不識庵か單騎敵陣をつきて天文二十三年の秋を思ひ出で、は河中島の曉霧に太刀の閃き黄襖驕馬面を裏める白布翻々として曉風に翻る彼か雄姿今尙彷彿たるを覺ぬ林も森も模糊として地上の影一步退けば天上の影の一步進みて西空美しく飾らしと見るも東の間蓋尻に至る時も早や眼に入るものは点々たる唯電燈の光のみ一行は此處にて乗換へぬ長き旅の疲勞と倦怠と一度に至りて時の過ぐるご共に眠氣を加へ果ては昏々として前後も知らずつひに福嶋の驛に着き驛夫の聲に驚きて周章下車せしは可笑しかりし停車場には校長先生始め諸先生及び一年生諸君開夜に關らず出迎へ居られ先づ肉親の如

き親しみを覺ぬ互に事なかりし喜を述べ此處に一同解散して己かじ、戀しき古巢の我家をさしぬ。(完)

◎御嶽登山の記

相山節 男

【登山第一日】 相山節 男 炎暑に射付けられつゝ勞働する夏期實習も終り我等か一日千秋の思ひに待ちし御嶽登山の日は來りぬ二十六日の黎明三時温き夢も半ば残して起床の鐘と共に飛び起き例の清冽なる洗面所の水にて口を嗽ぎ早々に草鞋脚の旅装に身を固め豫て用意の金剛杖を手にして我學ひの舎を後にす、時は正に四時天地はまたほの暗く福嶋の町も朝霧に深く閉ちこめられぬ午前五時一行六十名の木曾健兒は行人橋に集合し校長先生外一二の先生引卒の下に凜としたる朝の大氣に吹き送られつゝ意氣揚々として出發せり本道より右折して愈々黒澤口に入れば足さき漸く仰ぐ矢久保峠を越へて中澤なる小村落に出で尙稍進めば溪流潺湲として路に沿うて流るゝあり四方山の雜語に花を咲かせて合渡峠を下れば即ち黒澤に至るあり此地にて有名なる武居旅館にて一同休憩し茶菓を喫し夫より三百級もある磴を上りて進み縣社御嶽神社里宮(大己貴命及少彦名命を祀る)に參拜して安全の登山を念じて羽入に至る即ち二合目なり

之れより五合目に至る間は軟草絨氈を敷きて心地よく谷庭より吹き上る涼風千金の價あり此の頃一行は三々五々相伍して進む山上よりは隊を組み伍を結びて下り來るに會ふ其の鈴の音歩に従ひてチリン／＼と我等の耳に入り來る漸くにして草野原を出づ五合目より六合目の間は鬱蒼たる大森林あり人呼んで扇ヶ森と言ふ此の所に入れば天候少しく變りて雲頻りに動き風はよ／＼荒くして無慘にも淋しき森林中の我々を襲ひぬ我等は身にせるごさを堅く引き廻して歩を早めようよう七合目の小屋に身をかくす時は午後二時あり雷雨の霽るゝを待ちて又程に上る此の頃より途漸く険にして山骨露出し歩行困難にして數歩登れば喉乾き汗出づ休めば汗忽ち收り寒氣は漸く肌を透す登るも苦しく休むも苦しいよ／＼登りて八合目に至れば殘雪は皚々として我等を迎へぬ一行は争ひ取りて喫す愈々登れば燒石熔岩は磊々たり九合目に着する頃脚底より纏漫せる濃霧は又我等を襲ひぬ依て道を失はんことををそれて早々に小屋内に入るや、ありて霧霽るれば又上る一山又樹木なくたゞ僅かにハヒ松、高山植物の類を見るのみ過ぎこし道をと返り見れば白雲はすでに脚底にありて雲は波浪の如く山は島嶼の如く實に高山の氣分を味はしめぬ進みて宿所たる二の池小屋に着す先着の友は早くも旅装を解きて我等を迎ふ小屋に入りしは四時頃なりやうやく金剛杖にて此に至りたれば身のつ

かれ實に甚しく其の夜は淋しき山頂に半熟の飯と味噌汁とに飯を醫して一睡す

□登山第二日 小縣 球 次

枕を撤かす寒風に夢を破られ、起ちて旅装に身を固め、食事を終へぬ。時は七月二十七日の早曉、場所は御嶽山頂二の池小屋にして、坂下は直ちに信濃の大森林あり、午前四時過ぎにもやあらむ。黒天尙、ほの暗く、風の音のみ高し、東の空を望めば水平線に浴して燦りたる樺色の横たはるあり。上りては濃き藍色の空となり、こゝに燦爛たるものありて黄金の弓を掛く、光さやかにして、さあから東嶺を鎮するに似たり。左手に黒くさし出でたるは淺間山あり、此處彼處の連山は連る雲の爲め、唯頂のみ突出す、さなから海中の島を望むに異ならず、暫くする程に、曉風冷々として我等の袖を掃ふ、一分二分する程に黄金の弓は金玉とあり金光射來り、忽然として猩紅の一點、山端に浮び出でぬ。我等一行は方向を變へて此處より三ノ池四ノ池に行きぬ、此邊勾配急ある壁面に、ごろた石堆積し僅かに小さき高山植物を生ずるのみにて、突兀たる絶峰は堂々として、天を摩する様又別様の趣あり。此邊の絶峰たるマリシテン等を経て、一ノ池に達す、一ノ池を一週し差程に上る心地もあしに、愈々頂峰に達しぬ。全峰山骨を現し又一草なし、而も妙義の如く

細工的ならず、奇峭雄拔、誠に神仙の山とも云ふ可なり。此處には一棟の堂舎ありて、御嶽の神又こゝにまします。此裏は絶壁千仞の、ごく谷にして山壁深く陥つて、風は硫化水素の匂を包み、硫氣は我々の鼻をつく。時には太陽は天心にありて我等を照せば流石高山の頂も冷ならず、此社より石段を下れば郵便局あり此處にて思々の葉書を出す者、スタンプをたす者等あり。たま／＼柔き町ありてヒューと呻を立て耳朶を掠め行くものは高山の霧なり。我等一行は王瀧道頂上の小屋にて中食を終り夫より下り道あれば満腹をかへて飛下りぬ。處々に偃松ありて岩ご共に寂寞たる感を呈す、我々豫て用意せる高山植物をば十數株づゝ取りポケットに秘めて又下る。或は森林に、或は原野に、或は茶屋に、又は險道にかゝりて午後二時過ぎ王瀧松原旅館に着きて旅装を解きぬ。間もかく天俄に曇りて雷雨盆をくつがへし暫しはあやめも分かざりしが一時間許にして雲散じ雨霽れて日光輝き渡りぬ。

□登山三日目 立道 乙 松

兩日の疲勞を涼しき王瀧の一夜の夢に醫し元氣いや増したる一行は五時を報する頃颯々たる朝風に吹かれつゝ玉なす草露を踏み分けて鞍馬橋に向ふ一里を聞きし道も夢の間、忽ち鞍馬に達しぬ溪澗に架せる橋の高

きには驚かざるを得ずその下を一條の清流  
潺湲として静かに渦巻返して流る其の深  
さ幾何あるや計り知れず橋上より見渡せば  
兩岸の奇石怪巖屹立し頭を摧折せられたる  
が如き老松巨楡その割目に生じ岩崩壊し  
て逆になり危く支へられたる有り岩土は  
緑樹鬱蒼たる美林にして其の影水に映する  
様等名状すべからず林學博士本多静六氏が  
此の地に遊びて天下の絶景なりと稱せし  
決して過言にあらざるなり橋を渡りて畑の  
中を通り裏鞍馬に行きぬ表鞍馬に比すれば  
流れ静かに河幅廣く對岸の岩石屏立し岩間  
に蹣跚咲き亂れ流れに影を映する景趣決し  
て隅には置べからず幾拾日見ても決して倦  
まざる景を名殘惜しげに辭し羊腸たる坂路  
を溯りて峠に達せり御嶽の白皚々たる雄姿  
繚漫せる朝霧の間に雄然として聳立する様  
げに日本アルプスの雄峯たるにそむかず陸  
濕ある所を下り行けばやがて常盤橋に出で  
ぬ思ひし程よくはあけられ橋下の淵は點塵  
なく鏡の如く澄めるその深きは他には見ら  
れずかくて元氣寸毫も衰へざる一行は悠々  
と新街道を通りて歸校せしは十一時ありき  
●(完)●

◎東海の道を尋ねて

光風生

左に掲ぐる断片的の文は先頃夏休みを利用して東海道の  
の所々訪れし時の紀行文なり  
東海の列車……車内美にして車幅廣く廣る

乗心地よし列車は魔の如き鋭き音をひびか  
せて白雲と共に東に走る事早し。  
安城農林學校……窓より望見す濃尾の野に  
巍然として聳ゆるは先頃我校をたごつれし  
安城健兒の學び舎なり涼風入らず車内ひし  
くるし。

岡崎附近……兩眼に収まる物皆田あり生氣  
にもゆる緑色の田あり所々鳴子、案山子立  
つ其の數頗る多し雀の高く低く群をあして  
緑田の上をさびまはるを見る。

御油の海……潮風に染みてや、灰色をたべ  
る白帆涼風の笑みを入れ油を流せし如き海  
原を静かにかもめ飛び交ふ沖へへ……と流る  
辨天嶋……鏡の如く澄める濱名湖を横断せ  
る列車は辨天嶋に入る天や、晴れ藍色輝わ  
たり觸らば指も染まらん心地す。

見ることもあしに見る眼の隅と湧き出でし雲  
の峰に行けば白き光、瞳を射る、濱名の水  
ゆるやかにめぐれり碧を熔きたる如き水は  
縮緬の如き漣を立つ湖と海との境頗る狭ま  
られども水深くして死色を呈す。

この水奇しき神祕のロマンスを含めるとか  
や白きうねりを立てる潮水は青色の水上に  
白布を敷きつゝ濱名の喉首を乗り越して内  
浦に寄す西に漂よひ東にさすらふ白帆の數  
しれず折から發動機の音高く紫煙を出して  
進むモーターボートあり進みし跡數十間に  
亘り明にして青連ゆらゆらと立騒ぐ。

時に楚々たるの一佳人船中にあり雪の如き  
ハンカチーフ海風にひらひらとびるがへる  
月よ沈まされ悠久の夜よ更けされこの望み  
もはかなき一場の夢ありき。

まちはあこがれしゆかしの鐘の音は遂にひび  
かざりき。  
梨畑……鈴川原附近には梨畑桃畑西瓜畑頗  
る多し就中梨畑は其の最を占む。  
梨畑の大きな縦横共に十四五間有りいづれ  
の畑も皆鈴成かりにして思はず唾液を出し  
喉口をならさしむ。

流れも早し富士の水……拳大の小石のみ散  
在し砂粒を見す水急にして川原荒れたり水  
量大井川よりや、多し川邊近くに富士製板  
會社あり中空に聳ゆる黒き煙突より出づる黒  
煙は川面に漂よひぬ。

沼津町……停車場頗る美あり蓋し此町には  
御用邸を初め貴顯の別邸多き故貴人の往來  
絶へざればなり人口二万三千を數ふ市街整  
然として西洋風の商店軒を並ぶこの町より  
三島行の電車あり。

夜は十時過ぎ雨白くばらばらと一しきり庭  
を打つ涼味ふところに入り寝ぬるを忘る。  
静浦の浪……東海海邊中此の邊の景か尤  
もすぐれたる所ならんか。

牛臥山の彼方愛鷹山を跨とし千本濱に續く  
田子の浦の長汀に打ちよする白波を裳裾と  
する芙蓉の絶景はいはすもかな。

近く脚下にゆるく寄せては返す男波女波は  
實に磯波の好標本たり。  
海原遠く見たせば伊豆の山々は雲とまが  
ひ天と水との境分ち難し。

松並木……徳川三百年の長き歴史を語り今  
尙衰へざるは東海の松並木なり。  
老木の松はみ空に聳わて千歳のみごりの色  
いよん、鮮にして滴るばかりあり。  
天をざり立つ松樹の幹には苦むし鳥はね二  
しほゆかしさを増す過ぎ去りし往時を問は  
んとするも答へず。

草むす家……この附近点々と農家散在すさ  
は云へ農家は名のみ柱かたむき草茫茫と  
屋根に生ひ立ち青く輪をかして立昇る煙は  
さひ畑より出づるが如く見ゆ二階立の家見  
る事能はず蓋し参さん交代の餘弊か。

大井川……水枯れたりにこれる一條の水遠  
州灘に入る廣き川原には無數の小石散在す  
一石たりとも皆昔の物語にせめり往時越す  
に越されぬ大井川と雲助に歌はれしはこゝ  
あり余心静かに眼をさちて過ぎ去りし昔を  
しのばんとするも心浮はず唯ごうごうたる  
ひびきを立て、鐵橋を走る車のきしる音を  
聞くのみ。

雲上に聳ゆる芙蓉峯……千古變はらざる芙  
蓉峰は白雪皚々として高く雲上に屹立す。  
白衣の登山者列車内にすしすめあり鈴のや  
さしき音もいまはかまびすし列車は今かん  
ばら過ぎしなり。

白波巖に激す濱邊にて……余は今與津の濱  
邊に立ちて遠く太平洋を望めり。  
數十里の彼方より打ち寄せ來る大波は岸  
近くをびゆる岩角に激し半は海中に没せる  
巖に碎かれ遠く飛沫を散らして壯快をきは

眼を射るか如き強光は鐵をもとかさんとし  
白砂一帯をとりつけ天地風全く死して萬象  
聲を収む。  
海岸近くは潮水に浴したる人々、浴さんご  
歩をばこぶ人々にて織るか如し海中に西瓜  
の浮べる如く見ゆるは頭のみ海上に出たし  
遊泳する人々なり放手を切りて勇ましく沖  
へん、と進む勇士遠く白帆浮ぶ邊を漂ふ達  
人、女浪かるらかに打ち寄する波打際にて  
嬉々として戯る兒女。

自然のすかたに還れる人々は何の束縛なく  
平和に自然の一大恩恵を受けて遊びまはり  
われり自然に還れる者は幸ある哉。  
いづれの人々も皆赤銅色を呈し筋肉隆々と  
して元氣潑潑たる實に海岸ならでは見る事  
能はず。

眠れる夜の海……月清らかにして星まれな  
り浪打ちきはに佇すめば濱千鳥鳴く音を止  
めて波のひびきのみいささたり鉛の如く  
青白き海は死せるか如く静かにして夢の如  
き水けぶり立つを見る。

ゆらん、と立騒ぐ漣にかゝれる月影は右に  
左に位置を變じつゝ次第々々に霞める海  
原の方へ進み行けり漁火のほかに見ゆるは  
清水の邊か橋の聲いまた聴えず、月愈々さ  
ね波愈々静かなり。

やさしき天然の音楽はます、と妙味を加へ  
來れりバシヤ!!バシヤ!!とささやく波の音  
は人間の眠れるに乘じ何事か語るものゝ如  
し。

むこの附近名ある人の別荘地あり先年  
られし井上侯爵の別荘も此地にあり。  
濱近くに長く打續く松樹は長年月の間大浪  
にもまれ海風に吹かれ曲々として枝よく繁  
り風流人ならざる余の眼迄引く。  
清見寺の鐘聲……夜半のねざめに鐘の音ひ  
びきぬたもへばわれは清見寺のふもとにさ  
すへる身ぞ、ゆかしの鐘の音やこの鐘きか  
むとて吾六とせの春秋をあたくらしき、  
うれしくもたのしき今の吾身哉、いざやた  
もひのまゝに聴きあかむ。  
あゝ筆を取りては明治の文壇を風靡させ地  
下に暎しては世人をして愛慕措く能はざら  
しむる文豪高山樗牛をして久戀回慕せしめ  
し鐘をらすや。

興津の荒浪立ち騒ぐ近くの山腹に立てる鐘  
樓の鐘の音は如何にゆかしかりしけん。  
余は清見寺のふもとにさすらひ來れり餘音  
爛々として渡る鐘のひびきをきかむとて。  
眞紅の太陽は名殘の光を收めて遠く駿河灣  
上に没しぬ金色の餘光も今は消ひ失せて刻  
々と紫色は黒色に變じ夜のほとりはさがれ  
り鴉は小暗き森に隠れつゝ獨り淋しげに遅  
々として鳴き叫びぬ胸をさく如き聲心をつ  
くが如き聲。  
半月明るく星まばらにみ空に輝き岸打つ浪  
の音静かなり袖師、清水の長汀夢の如く黒  
すみ沈々として夜は更けぬ。  
あゝされど星も月も仇なりき星よ傾かざれ

あゝくしき海よ死せるか如く静かある夜の  
海よ汝は大古より今に至る迄到底人事にて  
さぐる事の出来ざる神秘的なる絶對的なる  
ロマンスを含み來たりしならん。  
到底人事にてなす能はざる偉大あるわざを  
なじきたりしならん、汝は汝のひみつをこ  
こしへに保たんと欲するや。【未完】

◎岐阜に江畑大人をたご  
つれいごねむころなる  
もてなしをうけ長良川  
の鵜飼に遊びて  
安井正夫

夏のよのみちかきひまを惜むかなながら  
の川に舟遊ひして  
君とくみきみどかたりて長良川うふねま  
すまそ樂しかりける  
◎養老の瀑布にて  
身の老をやしあふたきのしらいとはくり  
かへしてもみるへかりけれ

雑報

◎學校通信

○登山 前號所報の通り二年生は七月廿六  
日七宮校長、新家教諭、矢幡書記附添ひ御  
嶽に上り頂上一泊翌廿七日は三の池、摩利  
支天を見た鉢巡りをなし王瀧に下りて一泊  
廿八日途中鞍馬、常盤の諸勝を探りて正午  
無事歸校せり又一年生は廿七日西澤、島内  
兩教諭、中田助手附添ひ駒ヶ岳に登山頂上  
に一泊の上翌廿八日午前中無事歸校せるが  
何れも天氣順良にして非常良好都合なき

○飯嶋教諭出張 飯嶋教諭は八月一日より  
輕井澤に於ける中等教員英語講習會に出席  
し十日講習を終へて歸校せられたり  
○聽講 八月十九日は始業式當日恰も福嶋  
小學校に於て醫學博士高木兼寛男の体育に  
關する講演ありしを以て始業式を廢し一同  
小學校に出向して聽講せり

◎會員異動

○藤巻壽一君 兵庫縣生野嶺山に入られたり  
○土條嘉一郎君 郡山小林区署に轉任せられたり  
○山下不二三君 今同青森縣喜良市小林区署に勤務せら  
るゝ事となり

◎新潟市に於ける蘇門會

七月十九日新潟市に於ける大日本山林會に  
出席せる蘇門出の勇士の面々全夜市内行形  
亭に打集ひ大懇親會を開き席上龍蛇の醉筆  
に當夜の愉快を忍ばしむる珍句妙歌の揮毫  
を恐多くも安藤珍竹山人より會長宛寄せ來  
りたるが何分にも萬丈の快氣焰を三寸の筆  
に縮めし事とて墨痕淋漓の長巻故こゝには  
轉載を見合すべし但し會合の面々の芳名を  
左に掲ぐれば

珍竹山人、双樹、遠藤、宮崎、但馬、伊  
東、福田、忠子、江州、脇田、松澤、蘇  
岳坊、宇佐美の諸君子なり

◎本會並に母校宛暑中見舞を寄せ  
られたる諸彦左の如し茲に記し  
て謝意を表す

○古澤久衛君 ○藤巻壽一君 ○上條嘉一郎君  
○小岩井茂樹君 ○伊深幾太郎君 ○後藤豊吉  
君 ○米倉巧君 ○梅村計介君 ○千村彌之助君  
○吉田良惠君 ○林森君 ○青木忠天君 ○平田  
實君 ○山本茂君 ○飯沼要人君 ○大瀬房人君  
○等々方與八君 ○前田正義君

◎校友代領収報告

福田友次郎君 四尾長一君

◎謝恩金領収報告

西尾長一君 金五十錢(征矢野書記)

◎高樋君弔慰金領収報告

西尾長一君 中田辰雄君 金五十錢 金五十錢

大場、福山兩教諭謝恩金募集

加藤、征矢野兩書記謝恩金募集  
大場、福山兩教諭及び退職せら  
れたる加藤、征矢野兩書記並に今回退職せ  
られたる福山教諭は多年本校及校友會の爲  
盡瘁され功績不抄候に付酬勞の爲聊か醜金  
贈呈致度候間會員諸君は左記により御送金  
被成下此段得貴意候也

一、金額は別に制限を設けず  
二、送金は校友會宛の事。但し誰に何程と  
御明記の事  
三、締切は九月末日限り  
四、受取證は差上り本誌に發表の筈に候

◎弔慰金募集廣告

全窓高樋博君不幸五月初旬二暨の犯す所と  
なり遂に六月二十五日愛兒を遺し永眠せら  
る誠痛惜に堪へず茲に吾々有志相謀り廣  
く弔慰金を募り遺族に贈り以て聊か全君の  
靈を慰め度に就ては本舉に御賛成被下度此  
段得貴意候  
追而弔慰金は九月末日迄に校友會宛にて  
御送付願度尙領収に付ては林友誌上に掲  
載可致候

大正六年七月廿日 發起人  
但馬 廣造  
倉科 浦伍郎  
仲侯 莊太郎  
遠藤 宗作  
齋藤 正雄

長野縣西筑摩郡島町四〇四地  
編纂並發行人 安井正夫  
大正六年八月廿三日印刷